見えない障害（上）

共生へ 適応に協力の輪

バザーの反省点や、今後の運営について話し合う「アスペの会」の集会

他人の感情や、言葉の裏の意味を読み取るのが苦手。自分のことばかり話し続け、会話が成立しない。一つの考えに固執し、他人とぶつかる――。こうした悩みを訴える人が増えている。

精神科では「アスペルガー症候群」という聞き慣れない病名を告げられることがある。言語力や会話力は高いが、対人関係がうまくいかない発達障害Ⓓの一つで、うつや不眠症に陥るなどの二次障害も深刻だ。

県内には早くから患者と家族の自助グループがある。最近では、金沢大を中心に治療と共生を両立させる取り組みも始まり、金沢を発達障害者対策のモデル地区にしようとの機運が高まっている。

◇

「人と目を合わせるのも、会話をするのも苦痛ですが、会社では必要と割り切り、何とか耐えています」。昨年11月、金沢大で開かれた発達障害者との共生を考える勉強会。集まった患者の家族を前に、県内に住む男性会社員(36)は伏し目がちに体験を語り出した。

子どもの頃から集団行動が苦手で、同級生と何をしゃべっていいかわからなかった。何気なく口にした一言でよく相手を怒らせた。大学では他人と話すのが怖くなり、教室にも入れなくなって中退した。

アルバイトから正社員に登用された今の会社でも、同僚の雑談の輪に入れず、取引先との交渉で失言し、上司から注意されることもある。それでも「おっちょこちょいなんです」と笑ってごまかせるようになり、勤続5年目で管理職に昇進した。今は対人関係の苦手意識を克服しようと、同じ悩みを抱える人の集まりに出て体験談を話せるまでになった。「こんなにうまくいっているケースは珍しい」。患者の家族からは羨望の声も上がった。

◇

アスペルガーは「見えない障害」だ。見た目では判別しにくい。患者も周囲に隠そうとする。病院に行っても、健常と障害のグレーゾーンに位置し、病名がつかないことも多い。

このため、行政の対策は大幅に遅れた。国内で研究や診療が本格化したのは2000年頃で、早期発見と、教育や就労の支援を自治体に求めた発達障害者支援法が施行されたのは05年だ。

行政の支援の遅れを見かね、県内では、02年に金沢大でコミュニケーション障害学を専門とする大井学教授(58)が中心となって、患者や家族を支援するNPO法人「アスペの会」を設立。患者を居酒屋に誘って人付き合いを学ばせたり、バザーを開いて接客の経験を積ませたりし、社会適応を促している。

会員で加賀市の男性(32)は10年前、就職の失敗をきっかけに精神科を受診し、アスペルガーと診断された。当初は「普通だと思っていたのに」と動揺したが、会に参加し、「自分だけじゃなかった」と気が楽になったという。

進学や就職の失敗を機に初めて障害と気付くケースは多いが、大人になってから投薬やカウンセリング治療を受けようにも、すでにうつなどを発症し、社会適応が難しいこともある。

そこで大井教授らの研究グループは、09年から市内の幼稚園や小学校で保護者向けの啓発活動を開始。早期発見、早期治療に向けた環境作りを進めている。10年には、一般市民との意見交換会も開き、協力の輪をさらに広めようとしている。

大井教授は「地域の絆が残る金沢なら、患者が社会適応に励み、地域も患者の行動をある程度許容する共生の実現が可能だ」と話す。

◇

発達障害者の理解と共生に向けた動きが広まっている。発達障害者を取り巻く県内の現状をリポートする。

Ⓓ 発達障害　知的発達の遅れを伴わない脳機能障害。アスペルガー症候群や自閉症、注意欠陥・多動性障害、学習障害などが含まれる。文部科学省の2002年の教員への調査では、通常学級に、その可能性のある児童が6・3％いた。